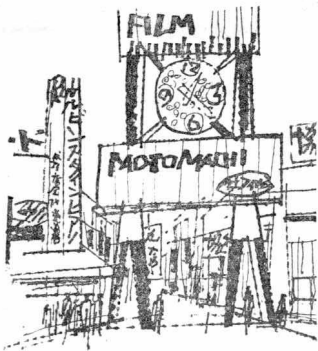


日本ミステリ・シリーズ

9

る 陳 舜 臣



著 者 略 歴

大正13年神戸に生る 大阪外語インド語部卒

昭和36年江戸川乱歩賞受賞

現住所 兵庫県神戸市生田区北野町1の31

主著書

「枯草の根」(講談社刊)

「三色の家」(講談社刊)

「弓の部屋」(東都書房刊)



第九回配本

定価三三〇円

割 れ る

日本ミステリ・シリーズ

第九巻

昭和三八年二月二〇日 三版印刷
昭和三八年二月二八日 三版発行

著 者 陳 舜 臣

発行者 早 川 清

印刷者 堀内文治郎

発行所 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町二〇二
電話 東京 〇五五六・二八〇・二八〇
〇五五六・二八〇(編集)

用紙・四国製紙KK/クロース・日本クロ
スKK/印刷・KK堀内印刷/製本・峯省堂

割

れ

る

目次

1	香港からの客	五
2	消えた兄	元
3	秋の日ざし	元
4	ホテルの殺人	四
5	心うごく	五
6	人生模様の渦	六
7	陶家の応接間	六
8	東京出張	九

9	被害者の身辺……………	一〇六
10	あかりの下……………	一二三
11	東京報告……………	一三九
12	張込み……………	一五〇
13	もろいアリバイ……………	一六四
14	修法カ原……………	一七四
15	岡山にて……………	一九〇
16	二つの情報……………	二〇四
17	じつは……………	二二四
18	真っ二つに……………	二三五

19

割れる

.....三九

20

静止した渦

.....三五

作者あとがき

.....三六

箱・カット
津神久三

I 香港からの客

岸壁で手を振っている男が三浦達夫であるとかって、林宝媛^{りんほうえん}は甲板のうえで、ほほえんだ。誰もわざわざ迎えに来てはくれないだろう、と彼女は思っていたのである。

林宝媛は岩佐商事株式会社香港支店のタイピストである。むろん現地採用だから、正式の社員ではない。それでも、彼女は二十才のときから五年間勤続しているのだ。

「いつか日本へ行きたい」

これが彼女の口ぐせだった。日本から派遣された駐在員から日本語を習ったのも、そのためだそう。大ていの連中は、はじめのうちこそ気ばらしに教えていたが、しまいには彼女の熱心さに辟易して、逃げ出したものである。そのなかで、二年間駐在した三浦達夫は、最も親切な教師であった。

熱意も素質もあつたうえ、一日じゅう日本語に接しているのだから、彼女は五年のあいだに、

かなり上達した。まだ妙な訛りがときどきとび出しはするが、一応、日本語に不自由しないまでになったのである。

宝媛は白い手袋をはめた手を振って、三浦にこたえた。

《仕事の関係で、あるいは突堤まで迎えに行けないかもしれない》

三浦の手紙には、そう書いてあった。

しがない現地採用のタイピストが、こつこつ貯金をして、やっと念願の日本旅行に來たのである。一カ月の休暇をもらっている。が、むろん人並みにホテル住いはできない。料金のやすいユースホテルを渡り歩こうといった、つつましい旅行なのだ。

《関西にいるあいだは、一切まかせて下さい。私は勤めがあるが、なんとかお世話をしますから》

手紙の文面ににじみ出ている三浦の好意が、宝媛にはうれしかった。しかし彼女は、誰にも迷惑をかけたくなかった。言葉もどうやら通じるので、ひとりで遊ぶつもりだ、ご配慮は感謝するが、どうか気をつかわないでほしい、——彼女はそう返事を書いた。

純然たる休暇で、会社の用事はなにもない。だが、東京本社や主な支店には挨拶に行くべきであらう。香港で知り合った社員がかなりいる。三浦は一年まえ日本に帰って、いまは神戸支店詰めになっている。神戸支店長の高田氏は、ヨーロッパ出張の途中、香港に三日ばかり滞在したが、そのとき宝媛が案内したのだ。

神戸で下船するので、神戸支店には真つききに行くつもりだった。神戸支店宛の手紙をよくタイプしたことがあって、彼女はその住所をそらんじていた。

生田区明石町 東南ビル 四〇七号室

場所は波止場のすぐ近くだときいた。

げんに三浦が迎えに来ているのだから、連れて行ってくれるだろう……。

声を出しても、まだ届かない距離である。宝媛は手を振りつづけた。そのため、肩がおかしくなったほどである。

「ミス・林^{リン}」

名を呼ばれてふりかえると、英人の事務長が手招きしていた。

防波堤のなかにはいると、ランチで入国管理庁や検疫所の役人が乗りこんできたが、上陸手続きがやっとすんだのである。預けてあったパスポートを返却してもらい、上陸後の手続について注意をうけた。

甲板に戻る途中、彼女はトイレットにはいった。

四日間の船旅は、幸いずっと快晴であった。彼女はほかになにもすることがないので、よく甲板で散歩をした。きびしい海上の太陽の直射で、顔がかなり日焼けしている。

トイレットの鏡で自分の顔を吟味し、彼女はコンパクトをとり出して、蓋をあけかけた。が、すぐに思い直して、それをハンドバッグのなかにしまいこんだ。

「顔なんて、どうだっていいじゃないの」

鏡のなかの自分にウィンクして、彼女は呟いた。彼女はただほつれ毛をかきあげ、襟もとにちよつと手をやっただけだった。

甲板に戻ってみると、船は岸壁によほどせまっていた。三浦達夫の顔が、さきほどよりも大きく見えた。浅黒い顔に似合う白い歯が、キラキラ光っている。

もどかしいほどゆっくりと、船は岸壁ににじり寄って、やっと停った。タラップがかけられた。三浦はタラップのそばに来て、あらためて手を振った。

もう声を出しても、きこえるほど近い。

まさか女だてらに、大声を出すわけにもいかない。三浦のほうは遠慮なく、両手で口のまわりをかこんで、どなるように話しかけた。

「お疲れさまあ！」

ほかの土地へ派遣される社員が香港支店に立ち寄ったとき、この『お疲れさま』という挨拶がよく使われた。宝媛にとっては、日本語でも挨拶の言葉は苦が手である。

彼女は返事のかわりに、にこにこ笑って、お辞儀をした。

こうして林宝媛は、神戸の突堤に、つつましいその日本観光旅行の第一歩を印したのである。

「一年見ない間に、ずいぶんきれいになりましたねえ」

車のなかで、三浦が言った。

この種の冗談には、宝媛も慣れていた。

「お上手ですこと」

「それから、日本語もうまくなりましたよ。誰かいい先生がついたの？」

「三浦さんよりいい先生なんていないわ」

「きみのほうこそお上手だよ。とにかく、今日は一日ゆっくりと休んで、明日からのんびりと

“日本の休日”を楽しむことだね」

宝媛は、ホホと笑った。

しかし、こんどの旅行は必ずしもものんびりとはできないのである。観光のほかに、彼女には別の用件もあったのだから。

「それよりも、三浦さん」と宝媛は話題をかえた。「やすい宿屋みつけてくれました？」

「ああ、それが……」

三浦はすこし言い淀んだ。

「どうなすったの？」宝媛は不安そうに、たずねた。

「やすい宿屋はいくらでもあるんだから、心配しなくていいよ」と三浦は言った。「きみがよかつたら、無料の宿屋はどうだろうと思ってね」

「無料の宿屋？」

「じつは、うちのビルの地階に、桃源亭という中国人経営の食堂があって、その主人の家の離れがぁいてるんだよ」

「離れ、ってなぁに？」

「離れという言葉は教えなかったなァ」三浦は苦笑しながら、説明した。「別棟の小さな家だよ。家族の住んでいる建物とは別に、すこし離れたところに小さな建物がある。それがつまり、離れなんですよ」

「でも、知らない人の家に……」

「はじめは、ぼくの家に泊ってもらおうと思ったよ。しかし、ちょうど弟夫婦が東京からやって来たんで、家は目下、超満員になってね」

「ユースホステルのほうが、気楽でいいわ」と宝媛は言った。

「陶さん——というのがその食堂の主人だが、あそこの家は気兼ねなんかなくてもいいんだ。離れから直接裏道へ抜ける戸があって、鍵も貸してもらえる。それに、きみとは同国人だし……」

「でもね……」

無料ということは、窮屈な予算で旅行をする宝媛にとっては、大そう魅力がある。しかし、話があまく出来すぎているような気もした。

「でも、そんなところは、やっぱり居心地がわるそうですわ」と宝媛は言った。

「とにかく、その陶さんに会ってみたいらどうです？　きっと気に入ると思いますかね」

タクシーは東南ビルのまえにとまった。

岩佐商事神戸支店は四階にある。だが三浦は、宝媛の旅行鞆をさげて、まず地階へ降りた。

「支店長さんに挨拶しなければ……」

と宝媛は言った。

「ひとまず、荷物を桃源亭に預けておきましょう」と三浦は言った。「こんな重いものをさげて、四階までのぼるのは大へんだ」

東南ビルの地階にある、ささやかな中華料理食堂『桃源亭』では、三時をすぎると、客はほとんどいなくなる。たいしてひろくない店でも、ガラんとした感じがするのだ。主人の陶展文は隅のテーブルにむかって、書きものをしていた。彼のむかいには、髪を赤く染め、眉を濃くかいた女が、脚を組んで坐っていた。爪も真っ赤に塗っている。からだも豊満で、なんともはでに目立つ女性である。年は三十前後にみえた。テーブルのうえには、籐で編んだバスケットが一つ置いてある。

陶展文がペンをうごかしているあいだ、女は退屈したのか、手をのばして、バスケットの蓋をあけた。

「ね、あかるくしてあげるわ。顔だけお出し」と女は言った。

バスケットのなかから、によつきりと出てきたのは、蛇の鎌首である。

「ほら、ここはいいにおいがするでしょ？ 食堂なのよ」

女は蛇に話しかける。

陶展文は上目づかいに、じろりと見たが、すぐ書きもののほうにかかった。

やがて書き終えたとみえ、彼は万年筆にキャップをかぶせた。

「さあ、これを南京町の薬屋へもって行けば、調合してくれるよ」

陶展文はそう言って、紙片をさし出した。漢方薬の処方なのだ。女はそれをうけとった。

「ありがとう」女は白い歯を出して礼を述べ、つぎの瞬間には、蛇に向って話しかけた。「き、またおはいり。もう帰るんだからね」

彼女が立ちあがったとき、陶展文は、

「こんどはどちら？」ときいた。

「岡山よ」女は答えた。

「じゃ、気をつけてね」

「サンキュー、フフ……」

女の動作は、すべてが大袈裟である。両手をひろげてくるりとふりむくところなど、まるで舞台のうえの所作にそっくりだった。

女は宮地多魔子という、ストリッパーであった。はだかになって、蛇をからだにまきつけるという特技をもっている。その職業にふさわしく、みごとに体格の持主である。外見は堂々たるものだが、なかみはすでに潰滅状態なのだ。陶展文はなんども入院をすすめたが、彼女は一向きき入れようとしなない。いまでは、もうおそすぎた。発作と発作のあいだが、だんだん縮まっている。いつも陶展文が漢方薬の処方を書いてやるが、一時のおさえになっても、病根はとくに不治の段階に達して、どうにもならないのだ。

彼女のうしろ姿を、陶展文はいたいたしそうに見送った。

陶展文は五十になるが、どう見ても四十にしか見えない。筋肉はひきしまって、すこしの弛緩もない。しかも、拳法できたえたからだは、いたってしなやかなのだ。大きな目は人なつっこいが、気をつけて見ると、その奥に鋭い光を秘めている。

彼は椅子に腰をかけたまま、目をとじた。腕組みをしているが、瞑想しているのか居眠りをしているのか、わからない。

四時を五分ばかりすぎたとき、三浦がはいってきた。

「陶さん」

と三浦は声をかけた。

三浦のうしろに中国服の若い女性がいるのを見て、陶展文は立ちあがった。

「ああ、このひとが、三浦さんの話してた香港のお嬢さんですね？」

「ええ、そうなんです」と三浦は言った。

「ひとつ、よろしくお願いします。……こちらが陶さん」

「よろしく」と宝媛は頭を下げた。

陶展文は彼女に椅子をすすめた。大げさな歓迎の身ぶりこそしないが、陶展文の態度には、心のこもったものがにじみ出ていた。

「船でおいでになったのですな」と陶展文は言った。「お疲れでしょう?」

「いいえ、お蔭さまで、海はずっとおだやかでしたから」

「それはなによりでした」

なんでもないやりとりのうちに、宝媛は相手からほのぼのとしたものを感じた。

三浦達夫が、そばから宝媛の顔をうかがっている。彼女と視線があつたとき、彼はもの問いたげな様子をみせた。

《どう? この人、気に入りましたか?》

そうたずねているようだった。

宝媛は三浦にむかつて、そつとうなずいてみせた。彼はそれで安心したようにみえた。

「では、荷物はここに預かってもらいましょうか。とにかく、一応、支店長には挨拶をしてきたほうがいいでしょうから」と三浦は言った。

「そうね……じゃ、あとで」宝媛は呟いた。